

機関番号：32610

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520174

研究課題名(和文) 新井白石『陶情詩集』の研究

研究課題名(英文) A Study of ARAI Hakuseki's "Tojoshishu"

研究代表者

せん 満江 (ZHAN MANJIANG)

杏林大学・外国語学部・教授

研究者番号：90206657

研究成果の概要(和文)：新井白石『陶情詩集』全百首の漢詩に現代語訳・語釈・用例等を施した。また、『陶情詩集』『唐詩選』『古文真宝』『聯珠詩格』をデータベース化した。さらに、青年期の白石、及びその漢詩についての論考を著した。

研究成果の概要(英文)：We translated ARAI Hakuseki's "Tojoshishu", which contains one hundred Chinese classical poems, in contemporary Japanese. In order to elucidate further, we added notes and preceding verses. In addition we compiled databases of "Tojoshishu" "Toshisen" "Kobunshimpo", and "Renjushikaku", wrote papers on the younger days ARAI Hakuseki and his poems.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本漢文、日本漢詩、日中文化交流、朝鮮通信使、比較文学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 新井白石の研究は、従来、その思想家・歴史家・政治家の側面に偏っていて、詩人としての白石研究は少ない。例えば、山路愛山著『新井白石』(民友社 明治27年)、上田万年著『新井白石』(広文堂 大正6年)、鮎沢信太郎著『新井白石の世界地理学』(京成社出版部 昭和16年)、中村孝也著『白石と徂徠と春台』(万里閣 昭和17年)、栗田元次著『新井白石の文治政治』(石崎書店 昭和27年)、古川哲史著『新井白石』(弘文堂 昭和28年)、宮崎道生著『新井白石序論』(芸林会 昭和29年、吉川弘文館 昭和52年)、同『新井白石』(至文堂 昭和32年)、同『新井白石の研究』(吉川弘文館 昭和33年)、同『定本折たく柴の記釈義』(至文堂 昭和

39年、近藤出版社 昭和60年)、同『新訂西洋紀聞』(平凡社 昭和43年)、宮崎道生著『新井白石の洋学と海外知識』(吉川弘文館 昭和48年)、勝田勝年著『新井白石の学問と思想』(雄山閣 昭和48年)、宮崎道生著『新井白石の時代と世界』(吉川弘文館 昭和50年)、同『新井白石の人物と政治』(吉川弘文館 昭和52年)、森原章著『新井白石研究論考』(森原章研究論考編集出版委員会 昭和58年)、宮崎道生著『新井白石と思想家文人』(吉川弘文館 昭和60年)、同編『新井白石の現代的考察』(吉川弘文館 昭和60年)、同著『新井白石の史学と地理学』(吉川弘文館 昭和63年)などの諸研究は、みなその思想家・歴史家・政治家の側面に関する研究が中心である。

(2) 一方、詩人としての白石研究は、今関天彰著「詩人としての新井白石(上)・(下)」(『雅友』25号・26号 昭和30年)が初めての本格的な詩人論であり、その後、吉川幸次郎著『鳳鳥不至 論語雑記 新井白石逸事』(新潮社 昭和46年)、一海知義・池澤一郎著『日本漢詩人選集5 新井白石』(研文出版 平成3年)、杉下元明著「八居の詩——新井白石と或るアンソロジーの成立」(『季刊 日本思想史』44号 平成6年)、石川忠久(本研究の研究分担者)著「新井白石の詩業について」(『斯文』103号 平成7年)、石本道明「詩人白石小論」(『季刊 日本思想史』46号 平成7年)、一海知義・池澤一郎注『江戸漢詩選 第2巻 儒者』(岩波書店 平成7年)、石川忠久(本研究の研究分担者)著「新井白石『陶情詩集』について」(『二松学舎大学大学院紀要 二松』第10集 平成8年)、池澤一郎著「新井白石と宋詩—白石漢詩における蘇軾・唐庚・王安石の影響—」(『明治大学教養論集』通巻317号 平成10年)などがあり、近年ようやく研究されるようになってきた。

(3) 本研究対象である『陶情詩集』は、白石26歳のときの詩集であり、折しも徳川綱吉の將軍就任を祝う朝鮮通信使が来日した際、対馬藩儒の西山健甫を介して通信使の目に触れ、その出来栄を評価され、通信使の成伯圭より序を作ってもらっている。当時、朝鮮通信使の高い学識には定評があり、彼らに評価されることで出世の糸口を見出すことも珍しくはなかった。若い白石もやはり西山健甫が木下順庵にこの通信使の序の一件を話したことが端緒となり、木門に加わることになる。やがて順庵の推挙で甲府城主徳川綱豊に出仕し、綱豊が將軍職を継いで家宣となると、白石は寄合として政治家としての手腕を揮うことになるのである。

(4) それゆえ、『陶情詩集』は白石の青年期的人格形成や詩人としての成長を考えるうえで、大変重要な資料といえよう。しかし、現状では、その研究はおろか、資料そのものが未公開のままである。『陶情詩集』は現在、新井家に蔵されており、ごく一部の研究者にしか目撃されていない。本研究の研究分担者石川忠久に『陶情詩集』についての今のところ唯一の論文があるが、詩集の全貌を公開するまでには至っていない。白石研究の第一人者である宮崎道生も『新井白石』(人物叢書 吉川弘文館 平成元年)の中で「白石の学問的業績がおしなべて文学性を備えているのも、政治意見書の場合、ヒューマニズムが脈打っているのも、その源泉は詩人白石にあるといえるのではあるまいか」と述べ

ており、是非とも研究すべきであると考える。

## 2. 研究の目的

(1) 未公開資料である『陶情詩集』の訳注及び研究がなされ、発表されれば、新井白石を研究する多くの者に新しい知見を提供することになる。従来、その思想家・歴史家・政治家の側面に偏していた研究の方向も、あらたに詩人としての研究が充実することによって、より総合的、全方向的な研究へと発展していくことが期待できる。

(2) 国文学者の研究によるだけでは不十分な、新井白石の詩における中国古典詩の影響を考察することは、いままでほとんどなされてこなかったことであり、中国古典詩研究に携わる者が手を染めることに意義がある。とくに朝鮮通信使に評価され、白石の詩風には中唐の詩人侯喜の風があると評されたからには、いったいなぜそのような印象を持たれたのか、『陶情詩集』の中身を詳細に読むことによって、考察してみる必要がある。本研究班は中国古典詩研究者で構成されており、白石の詩における中国古典詩の影響を考察するに十分な陣容を備えているので、白石の青年期の詩業を詳細に検討し、その詩風の実態を具体的に解明できると見通している。

(3) 白石が出世の糸口をつかむきっかけは、木下順庵の知遇を得たことであった。順庵は白石の『陶情詩集』に対する朝鮮通信使の高い評価を耳にし、白石をその門下に迎えたのである。その意味では、この詩集の存在は政治家白石を考える意味においても十分に大きいのである。青年期の白石がどのような漢籍を読み、どのような中国の詩人たちから影響を受けたのか、白石はいかなる基準でそれらを取捨選択し、何を選び取って受容したのか、そして、彼の詩風を中唐の詩人侯喜に喩えた朝鮮通信使との交流はどのようなものだったのか、こうした事柄を詳細に検討することによって、白石の青年期的人格形成の過程や詩作における修業のありさまを明らかにできるであろう。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究班は、すでに『陶情詩集』の一部に詳細な訳注を施し、発表している。紫陽会「新井白石『陶情詩集』——中国古典詩研究の立場から」(『中唐文学会報』第14号 好文出版 平成19年) 内容簡介:「なぜ新井白石の詩を読むのか」詹 満江、『陶情詩集』とは」三上英司、「松菴即事」詩 市川桃子、「稲村崎」詩 三上英司、「夏雨晴」詩 高芝麻子、「題尼寺壁」詩 詹 満江(監修:石川忠久 辞書担当:詹 満江 六朝詩担当:大村史人 唐詩担当:松浦史子・高芝

麻子 宋詩担当：市川桃子 元明清詩担当：  
三上英司 まとめ：高芝麻子・詹 満江)

(2) まず、『陶情詩集』所収の一百首の詩全てに詳細な訳注を施す。そのために十分な資料収集を行う。白石が青年期に訪れた場所(浅草・久留里・山形など)を現地調査し、名古屋の新井家を訪問し、現在の新井家当主から様々なお話を伺うとともに、所蔵の『陶情詩集』の実物を見せてもらい、それに関連する書簡など、研究に必要な資料を見せてもらう。

従来、国文学者がもっぱら研究していたが、日本漢詩を中国文学研究者の視点で捉え直すことも重要であると考え、中国古典詩研究の専門知識を生かして、白石詩における中国古典詩の影響の様相を明らかにする。

白石は初唐・盛唐の詩及び明詩を尊んだというが、具体的に『陶情詩集』においてはいかなる点において、そのような形跡が見られるか、詳細な検討を行う。

また、白石の詩だけでなく、その生い立ちや青年期を検討し、どのような精神的成長をとげたのか、それは詩作にどのような形で現れているか、現地調査の結果も踏まえて、できるだけ詳しく考察する。

#### 4. 研究成果

(1) 新井白石『陶情詩集』全一百首に、訓読、平仄、詩形、押韻、背景、現代語訳、語釈、用例、(作品によっては)補説を施した。

(2) 現地調査を行ったことによって、白石が青年期に訪れた久留里城跡から古戦場を望むことができた。『陶情詩集』の「總州望陀縣治の東山故城に登る」詩に詠じられた古戦場と東山との詳しい位置関係を明らかにできた。

また、両国の吉良邸跡を調査し、吉良邸の北隣にある久留里藩主土屋家邸の所在を確認し、白石が幼少時から十代後半までを過ごした場所と土屋家への仕官を解かれ、その後過ごした浅草(坂東報恩寺内であるが、現在の同寺と同じ場所であるかどうかは不明)との位置関係をおおよそ知ることができた。

(3) 『陶情詩集』に詳細な訳注を施すにあたって、『陶情詩集』の全作品をデータベース化した。また、用例を調査するために、『三体詩』の詠物詩部分(『三体詩』は四庫全書電子版によって検索できるが、四庫全書所収のテキストには詠物詩部分を欠くので、その部分を補った)、『古文真宝(前集)』『聯珠詩格』『唐詩選』をデータベース化した。

(4) 『陶情詩集』に詳細な訳注を施し、

また、現地調査を行った結果、白石が青年期に詠じた漢詩の特色が明らかになった。後年の白石の漢詩は、唐詩を祖述し、しばしば唐詩の句をそのまま自分の作品の中に使ったと言われる。しかし、今回の研究によって、青年期の白石の漢詩には従来の評価とは異なる側面があることがわかった。

まず、唐詩よりも宋詩の影響が顕著である。具体的には、『唐詩選』の影響を受けた形跡が見られない。もちろん、白石が青年であった時期には、まだ『唐詩選』は日本に普及していなかったもので、これは当然といえるが、少なくとも『唐詩訓解』(『唐詩選』との関係は深い)は流通していたゆえ、白石が絶対に『唐詩訓解』すら見られなかったとはいえないのである。青年期の白石は少なくとも唐詩への傾倒はまだなかったといえよう。

次に顕著なことは、『古文真宝』や『聯珠詩格』のような、中国で編纂された詩集であるが、中国では散逸し、日本に残された詩集を参照している点である。これは、一部の白石の詩に明らかに影響を与えたと思われる詩人の作品が、『古文真宝』や『聯珠詩格』にしか見られないことで確かめられる。特に、その詩人の事跡や詩が中国のどの文献にも見られない場合、それは単に白石の詩作に影響を与えたというだけでなく、当時の日中文化交流の実情を考えたり、中国文学史の欠落を埋めたりする上でも貴重な事例であると思われる。

また、若き白石は格別に梅の花を好んだらしく、梅の花をしばしば漢詩に詠じている。その偏愛ぶりは通り一遍なものではなく、梅の花の香りが咲き始め、しかも朝に最も強く香ることさえ知っていたことが、その作品から窺えるのである。当時、梅の花は、武士階級に好まれたという。白石が梅の花をことさら愛するのは、ただ単純に好きだけではあるまい。当時の武士階級の価値観を反映しているものである。

『陶情詩集』の漢詩は、白石の嗜好ばかりを知るよすがにとどまらない。その交友の状況をも知ることができる。詩に登場する人物の大方は、残念ながらその事跡を明らかにできないが、わけても西山順泰、すなわち阿比留との交際は重要である。白石がこの詩集をまとめ、阿比留を通じて朝鮮通信使に見せることになった様子は、「對馬州山元立の朝鮮聘使を草梁に迎うるに従行するを送る」詩を読むことで知ることができる。

さらに、土屋家のお家騒動に巻き込まれて仕官禁錮となった白石の心境は、その漢詩によく表現されている。白石は作品の中でしばしば在野のまま朽ち果てる覚悟を詠じているのである。幼少の頃には土屋利直におそばさらずでかわいがられた白石ゆえ、仕官禁錮の処分は相当にこたえたようであり、その詩

の中で詠じられる望郷の思いは、距離的には浅草と两国（あるいは久留里）の近さであっても、心理的には遥かに遠い昔の故郷だったのである。青年白石の苦悩する様子も、その漢詩から十分に読み取れたのである。

以上の考察を数篇の論考にまとめた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① せん 満江、新井白石青年期の読書と詠詩、杏林大学外国語学部紀要、査読有、第23号、2010、pp. 1-13

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

- ① 紫陽会 (石川 忠久、市川 桃子、せん 満江、三上 英司、森岡 ゆかり、遠藤 星希、大戸 温子、高芝 麻子)、新井白石『陶情詩集』の研究、汲古書院、2012、816 (出版予定：平成23年度科学研究費補助金研究成果公開促進費による)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

せん 満江 (ZHAN MANJIANG)  
杏林大学・外国語学部・教授  
研究者番号：90206657

##### (2) 研究分担者

市川 桃子 (ICHIKAWA MOMOKO)  
明海大学・外国語学部・教授  
研究者番号：20212996  
三上 英司 (MIKAMI EIJI)  
山形大学・地域教育文化学部・教授  
研究者番号：30219597

##### (3) 連携研究者

石川 忠久 (ISHIKAWA TADAHISA)  
二松学舎大学・文学部・名誉教授・顧問  
研究者番号：80112655

##### (4) 研究協力者

遠藤 星希 (ENDO SEIKI)  
明海大学・外国語学部・講師  
大戸 温子 (ODO HARUKO)  
お茶の水女子大学・大学院・博士後期課程  
高芝 麻子 (TAKASHIBA ASAKO)  
台湾中央研究院・文哲研究所・博士候選人  
森岡 ゆかり (MORIOKA YUKARI)  
京都女子大学・文学部・講師